2025 年度 9 月入学　博士後期課程　一般入学試験・国費留学生等入学試験

課題文を読んで、2500 字から 3000 字程度で設問に答えなさい。その際、資料や文献を参照し、それらを明記すること。参考文献や引用文献等のリストも上記文字数に含みます。

設問

課題文の論旨を 300 字程度でまとめなさい。その上で、日本語教育学においてはどのような研究課題となり得るか、2 つ以上の研究課題を提案した上で、それぞれで得られる研究成果の可能性や限界について、根拠を示しながら具体的に述べなさい。

課題文

誤解のコミュニケーション

「わかる」ことは、コミュニケーションを閉じる危険とつねに背中あわせです。

私たちが話をしていて、つまらない相手というのがいますね。こちらの話をぜんぜん聴いていない人です。

なんで私の話を聴いてくれないかというと、先方にはこちらの言うことが全部わかっているからです（少なくともご本人はそう思っているからです）。

その人にとっては、私は「いなくてもいい人間」なんです。だって、私の話はもうわかったから。「君の言いたいことはわかった」というのは、ですから「私の目の前から消えろ」という私の存在そのものを否定する遂行的なメッセージをも言外に発していることになります。

だから、私たちは「もう、わかったよ」と言われると傷つくのです。

聴き手に何の興味も示さないで熱く語り続ける語り手も、聴き手の存在を否定するメッセージを発信しているという点においては変わりません。

そういう人の話を聴かされると、私たちは弱い酸に侵されるように、深いところで傷つけられます。たとえば、校長先生の朝礼の訓示とか、式典に来賓で来ている市会議員の挨拶みたいなものが、その典型です。そういうものを聴かされると人間は苦痛を感じます。

これは苦痛を感じるのが、人間として正しい反応なんです。

こういう話が私たちに苦痛を与えるのは、そこでもやはり「扉」が閉じられているからです。

「扉が閉じられたことば」というのは、先ほども書いたとおり、聴き手に向かって、「あなたはいなくてもいい」と告げることばのことです。「あなたが私の話の内容を理解しようと理解しまいと、あなたがいようといまいと、私は今と同じことを言うだろう」と告げられて傷つかない人はいません。

ときどき「ひとりうなずき」をする人がいますね。自分で話していて、自分の話に自分でうなずく。私は「ひとりうなずき」の語り手と対面していると、気が滅入ってきます。言っていることが間違っているとか、勘に障るとか、そういう次元のことではありません。「おまえが私の話に

同意しようと反対しようと、私は私の話に同意する」というきっぱりとした「聴き手無視」の態度に毒されて、なんだかこっちの生命力がよろよろと萎えてきてしまうのです。

そういうものです。

目の前にいる人に「気づかわれている」と生きた心地がしてきて、「無視されている」とだんだん生命の炎が弱々しくなる。これはでも、人間として当然のことです。「シカト」といういじめ方が残酷なのは、そこにいる人間を存在しない人間のように扱うことで、「おまえはもう死んでいる」と無言のうちに告知しているからです。「殺してやる」というのなら、まだこっちは生きているわけですから、対処のしようもありますけれど、「死んでいる」と言われてしまうと、もう手も足も出ません。

私たちを傷つけ損なうコミュニケーションがどういうものかがわかると、それをひっくり返すと、私たちが愉悦を感じ、生きている実感が湧いてくるコミュニケーションがどういうものであるかもわかります。

私たちが聴いて気分のよくなることばというのはいくつかの種類がありますが、そのすべてに共通するのは（誤解を招く表現ですが）、そこに誤解の余地が残されているということです。

奇妙に聞こえるでしょう？

でも、誤解の余地なく理解が行き届いたコミュニケーションではなく、誤解の余地が確保されているコミュニケーションこそが、私たちにコミュニケーションをしている実感をもたらしてくれるのです。

十代の若い人たちは、非常に会話の語彙が貧困です。これは、みなさんも認めてくれると思います。

「むかつく」とか「うざい」とか「きもい」とか「かわいい」とか、ほんとうに十個くらいの単語だけで延々と会話をしている女子高校生などを電車の中でみかけます。

ふつうの大人の人は、そういうのを横で聴いて「近頃の若いもんは、なんという貧しいボキャブラリーで意思疎通を行っているのだろう。あんなことでちゃんとしたコミュニケーションが成立しているのであろうか」と苦々しい顔をしたりします。

まったく、おっしゃる通りです。

あれじゃ、意思疎通はできっこありませんね。

洋服を見ても「かわいい」、化粧を見ても「かわいい」、音楽を聴いても「かわいい」。

あれでは、そのような形容詞を交わし合っているもの同士でも、何を言っているのかお互いの心の中がわかっているとはとても思われません。「かわいい」のが洋服の色について言われているのか、デザインについて言われているのか、ボタン穴の微妙な位置関係について言われているのか、スリットの角度について言われているのか、「これ、かわいいね」「うん、かわいいね」だけじゃ、わかりっこありません。

……ほらね。

ちゃんと、若い人たちだって、わざと誤解の幅があるように、コミュニケーションしているでしょう？

それこそがコミュニケーションの「王道」だからです。

形容詞十個だけのチョー貧しいコミュニケーションでは、お互いに「何を言っているのか、よくわからない」。だから、聴く人間をつねに「不確かで曖昧な位置」にとどめおくことができる。それゆえに、これらの会話はコミュニケーションとして成立しているんです。

子どもたちが限定した語彙でしかコミュニケーションできなくなったというのは、たしかに一つの「退行」現象ではあるのですけれど、人間というのは、本人にしかわからない切実なる理由があって「退行」しているんですし、退行するときだって、必ずそれなりのしかたで「戻り道」を確保しているんです。（ヘンゼルとグレーテルが森の小径に撒いたパンくずみたいに）。

彼らのあのチョー貧しい語彙は、「自分の言いたいことをきちんとことばにしなさい」という言われ方で、学校教育でずっと「正しい」とされてきた「自己表現」の強制に対する、子どもたちの側からの「ノー」ではないかと私は思っています。

「そんなことばづかいじゃ、コミュニケーションできない」、そういうふうに感じている子どもたちが、生半可な自己表現に自分を託すことを拒んで、ある種の失語症をみずから進んで病むことで、コミュニケーションを回復しようとしている。そんな気が私にはするのです。

内田樹（二〇〇五）『先生はえらい』ちくまプリマー新書（一一三―一一九頁）